東洋大学史ブックレット　3

井上円了の教育理念

竹村　牧男

東洋大学
TOYO UNIVERSITY

東洋大学史ブックレット　3

井上円了の教育理念

竹村　牧男

目　次

一　私立哲学館の基盤をなすもの　1
二　円了の教育理念　麟祥院時代　10
三　円了の教育理念　第一回外遊後　16
四　円了の教育理念　蓬莱町時代　25
五　円了の教育理念　第二回外遊・哲学館事件以後　29
六　東洋大学の由来　33
付録　建学の精神の再構築　39
参考資料　いわゆる人間力の内容について　46

一　私立哲学館の基盤をなすもの

井上円了は、明治一八年、東京大学卒業時に、少年時代の師・石黒忠悳（ただのり）が当時の文部大臣・森有礼（ありのり）に円了の採用を勧めたことにより、官僚に登用されそうになります。このことは、当時の国の超エリートへの道であって、ふつうの人なら非常にうれしく思ってただちにその道に進むところでしょう。しかし円了は、「おぼしめしは誠にありがたいのですが、もとより私は本願寺の宗費生として大学に行ったのですから、官途に就くのは忍びないことです。それに私は日頃の誓願として、将来は宗教的教育事業に従事して、大いに世道人心のために尽瘁してみたいと思っていますので……」と

断ったといいます。円了にはこのときすでに、教育事業に一身を捧げようと心に深く期しているものがあったことがうかがえます。

官僚への道を断った彼には、もう一つ、本願寺に戻らなければならないということがありました。彼の在学中の保証人であった南条文雄は、東本願寺執事渥美契縁（かいえん）を訪ねて、円了が仏教各宗中はじめての学士であることを考慮して、本願寺として優遇措置を講ずるように要請します。教団は円了に教師教校の教授を命じます。これも、当時の東本願寺教団は大きな勢力と地位とを社会のなかに占めていましたから、その中でのエリートへの道であり、大変名誉なことだったでしょう。しかし、円了は、近代化が遅れ勢力が衰退している仏教の力を回復するには、俗人となって活動するほうが有効なこと、また学校設立の意志があることを理由に、命令を固辞したのでした。教団との交渉は再三再四にわたり、とりあえず「印度哲学取調掛」に任命されていますが、彼の意志は堅く、変わることがありませんでした。

東京大学哲学科卒業後、二年ほどした明治二〇年六月、円了はいよいよ教育活動を実践すべき時がきたと感じ、「哲学館開設の旨趣」発表します。円了がわずか満二九歳、数えで三〇歳の時のことです。

哲学館開設ノ旨趣（個人蔵）

実際に「私立哲学館」が開設されたのは九月一六日、麟祥院においてでした。教師は、東京大学および東本願寺関係の若い教員が中心でした。若い円了は資金を持っていたわけでなく、この「私立哲学館」が発足したかげには、「哲学館開設の旨趣」に賛同してくれた二八〇人の寄付がありました。中でも東京大学初代綜理に就任（明治一四年）した加藤弘之、東本願寺の東京留学生（慶応義塾）で、駒込の真浄寺の住職となった寺田福寿は、円了の親身の外護者でした。さらにややのちに、勝海舟が円了の志に賛同し

て、麟祥院から独立し新校舎を建設するにあたり、百円という大金を寄付してくれたことは有名です（このとき、東西本願寺は千円ずつ寄付してくれました）。円了が勝海舟と初めて出会ったのは、明治二二年九月四日のことといいます。勝海舟の娘夫婦が円了の仲人を務めた関係で、知遇を得たのでした。高木宏夫・三浦節夫著『井上円了の教育理念』によると、次のような出会いがあったといいます。

勝海舟

「勝海舟は井上円了を見て、最初に「おまえは若いな」といった。そして、井上円了が哲学館について説明すると、「やることがよければ必ずできると思うのは間違いだ。いくらよい仕事でも、金がなくてはできない。幕府が倒れたのも金がなかったからだ。おまえさんも、そんな議論めいたことばかりいっていないで、なんでも金をつくりなさい。これ

はほんの寸志だ」といって、百円を寄付してくれた。井上円了はこれに感激し、以後事業をするための教訓としたという。」（『井上円了の教育理念』五三頁）

勝海舟は円了をかわいがり、『海舟日記』には他に「古仏像金子十五円寄付」などともあり、また円了に多くの書を与えて哲学館への援助を惜しみませんでした。円了も勝海舟を尊敬し、講演などでもよく勝海舟にふれるのでした。

さらに円了は、哲学館経営のてこ入れのために、明治二三年から二六年まで、全国巡講を行い、寄付を募ります。もちろんこの活動は、寄付集めだけが目的ではなく、民衆に哲学の意義を理解してもらう活動でもあり、したがって社会教育の実践にもなったものでした。この間、「一道一府三十二県、四十八か国、二百二十か所」を巡回し、講演日数はのべ三九〇日、講演回数は八一六回に及ぶほどでした。円了はあくまでも一部の資産家に頼るのではなく、広く民衆の寄付を仰いだのです。哲学館は、

巡講踏跡図
豊原
大泊
清津
鏡城
旭川
札幌
根室
函館
青森
秋田
盛岡
山形
新潟
仙台
福島
富山
福井
長野
前橋
宇都宮
水戸
岐阜
浦和
甲府
横浜
千葉
京都
大阪
名古屋
静岡
津
奈良
和歌山
岡山
広島
神戸
香川
高知
八丈島
小笠原（父島・母島）
巡講エリア
※本図は『図録 東洋大学 100 年』（東洋大学創立 100 年史編纂委員会編、1987 年、学校法人東洋大学）38～39 ページ掲載図版によった。

井上円了の

大連
義州
新義州
威興
平壤
元山
通川
青島
開壤
杆城
海州
春川
仁川
水原
広州
郡山
論山
金堤
全州
大邸
迎日
光州
木浦
羅州
普州
慶州
釜山
山口
長崎
佐賀
松山
熊本
大分
鹿児島
宮崎
台北
新竹
台中
善義
台南

日本全国の民衆に支えられ、またどこまでも一般民衆への教育の普及をめざしていたのでした。私たちは、この原点を忘れてはならないと思います。

円了の教育活動の対象は、学校に来る者ばかりではありません。たとえば、哲学館開設後間もなく、翌年一月には『哲学館講義録』を創刊し、同時に館外生の制度を導入しています。哲学館の各教員の講義を記録して印刷し、地方の勉学に意欲ある者に毎月三回（八日・一八日・二八日発行）、送るというものです。講義録に疑問がある場合は、文書での質問を受けることもしていました。この講義録の購読者は非常に多かったということです。

なお、これは欧米とりわけアメリカでエクステンション活動の一環として行われていた通信教育のシステムにヒントを得たものですが、アメリカでこれが組織化され盛んになったのも一八九〇年代からで、円了の進取性がうかがわれます。この館外生の制度こそ、今日の通信教育を先取りしたものでした。

八大講義録

ちなみに、「哲学館高等科講義録」「妖怪学講義録」「尋常科講義録」「仏教専修科講義録」「漢学専修科講義録」「仏教普通科講義録」「漢学普通科講義録」「通俗哲学講義録」の八つを、「哲学館八大講義録」と名づけ、読者は一〇余万人に達したということです。

なお、円了は明治二九年から三五年の間にも全国巡講を行いました。この巡講も哲学館の運営資金の援助を仰ぐ目的がありました。さらに哲学館大学退隠後の明治三九年から逝去する大正八年までも全国巡講が行われていますが、これは社会教育の普及を目的としたものでした。円了の心には、常に日本全国の民衆がいたことがしのばれます。

二　円了の教育理念　麟祥院時代

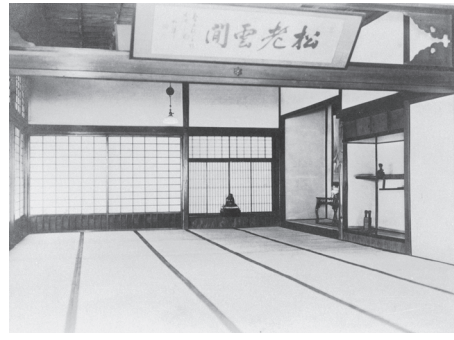
さて、井上円了が情熱をこめて挺身した教育事業の、その理念について見ていくことにしましょう。最初に、明治二〇年六月に発表された「哲学館開設の旨趣」を見るべきだと思います（『東洋大学百年史』資料編Ⅰ・上、八三～八四頁）。

その冒頭には、「世運の開明に進躋（しんさい）するゆえんのもの、もとより内外百般の事情に因（よ）るというといえども、主として智力の発達に因る。智力の発達するゆえんのもの、教育の方法に因るというといえども、主として学問の種類に因る」とあり、さらに高等の智力を発達するには高等の学問すなわち哲学によらなければならないと説いてい

ます。「……しかして諸種の学問中、最もその高等に位するものはすなわちこれ哲学にして、よくこれを研修するにあらずんば、もって高等の知力を発達し、高等の開明に進向するあたわず。これまた当然の理なりとす。哲学の必要たる、ここにおいてか知るべきなり」というのです。

麟祥院

また、哲学の特質を述べて、「それ哲学は百般事物につきて、その原理を探りその原則を定むるの学問にして、上は政治法律より下はもって百科の理学工芸におよび、みなその原理原則を斯学（しがく）に資取せざるはなし。すなわち、哲学は学問世界の中央政府にして万学を統轄するの学と称するも、決して過褒の言にあらざるなり。……」と言っています。



麟祥院教場

なお、この哲学を民衆に広めるために、「世の大学の課程を経過するの余資なき者、並びに原書に通ずるの優暇なき者」のために早く哲学を修め得る教育機関を作るのだと述べていることは有名です。最後には、「顧うにその異日に企望するゆえんの者、果たして能く成功に至らば、社会に益し、国家を利し、またいずくんぞその世運開進の一大補助とならざるを知らんや」と述べています。

その三ヶ月後、明治二〇年九月一六日、麟祥院での開館式が行われ、私立哲学館は開設されました。この式典での演説「開館旨趣」において、円了は哲学には「物差し」の実用性というものがあるのだと説いています。以下のようです。

「……しかしここに申しておかなければならないことは、学問と術とは性質の違うたもので、哲学は学問中の学問とも申すべきものなれば、術のように自分みずから事を取りてする方ではない、それゆえに直接に実際に関することはありますまい。しかしながらその理を応用して実際上に当てはめれば、ずいぶん実際の利益もあります。すなわち道徳宗教は皆な哲学を実際に当てはめた上で起ったものと見てよろしい。

今、譬えを挙げて哲学は学問中の学問であるから直ちに実用に関するものでないということ（に対し、そうではないということ）を説いて申しましょうに、哲学は大工の尺度（ものさし）のごとくとでも申しましょうか。大工の木を削るは尺度では削りません、けれども尺度は無用にして益がないかというに、決して無用ではない。なるほど木を削り物を取り扱うには格別尺度でなくても取り扱うことが出来るか知ませ

んが、仕事が込み入ってくれば尺度が必要となるに違いない。哲学は実際にあってただちに世間を支配するものでもなく、機械を拵(こしら)えるものでもないが、世間人事の尺度となるは哲学に違いない。ゆえに直接に事に当たらんでも無用ということは出来ません。……」(同前、九〇頁)

こうして医師・裁判官・政治家・教育者・宗教者等、あるいはいやしくも学問する者には論理学・倫理学・心理学等を含む哲学が必要なのであり、そのために早期に哲学を理解する道を設けるのだとの意思が述べられています。

さらに、哲学館設立の学問上の益に関して、第一に「哲学は実に諸学を総合統括する学問ですべての学問に関係を有しておりますから、西洋諸学の関係を知りその価値を知るには哲学を修めるが一番よろしい」こと、第二に「東洋学問の短所を補うの便益」があること、第三に「東洋の学問の弊を救うの益」があること、第四に「学者の

気風を高くして学問を公平に見る」こと、第五に「東洋の従来の学問を利用」できることをあげています。このため、「東洋の学問を研究して、この中でこれだけは悪い・これだけはよろしいということを選り分けて、世界中にその学風を起こすには、哲学館のごときものありて西洋哲学と東洋哲学を兼修することが必要である」と述べています。西洋を学ぶことによって、東洋の今後の道がわかるはずだというのです。最後には、「今日にありては哲学館ははなはだ微々たるものでありますけれども、後来、日本の文明を振起し社会の開明を進めて行くには、その中に加わってこの哲学館も幾分か力あるものになろうと思います」と述べています（以上、同前、九二～九三頁）。

三　円了の教育理念　第二回外遊後

哲学館を開設した後、円了は明治二一年六月から、ほぼ一年間外遊しました。横浜から出航し、訪問先は、サンフランシスコ・ニューヨーク・ロンドン・パリ・ローマ・ウイーン・ベルリン・パリなどであり、帰路はマルセーユから出発、エジプト・アラビア・インド・中国を経て横浜に帰着したのです。欧米の政教関係・東洋学研究の事情の視察が主目的の旅です。

帰国後、円了は『欧米各国政教日記』上・下を著わしています。円了がこの旅でもっとも感銘を受けたことは、どの国も、自国の学問あるいは言語・文章・歴史・宗

教等の伝統を大切にし、「独立の精神」を有していることでした。ここから、日本伝統の学問・文化の擁護・発展の重要性を訴えるようになります。もちろん西洋の学術も研究教育すべきなのですが、日本の独立を全うするためには、まず伝統の学問を、傍ら西洋の学問を究明すべきだとするのです。明治二二年七月二八日の「哲学館改良の目的に関して意見」には、以下のようにあります。

「第一　各国皆その国従来の学問・芸術、すなわちその国の言語学・文章学・歴史学・宗教学を講究して怠ることなく、ますますこれを保護しますますこれを振起せんとすること切なり。これ大いにその国の独立に関係あることにして、一国を諸強国の間に維持して独立を全うせんと欲せば、その国の言語・文章・歴史・宗教を保護せざるべからず。……いやしくも日本国あり日本国固有の学術、宗教ある以上は、まずこれを講究し傍ら西洋の学術を講究せざるべからず。

第二　我が日本の地はこれを西洋に比するに印度・支那の古学はみなことごとく存し、これを講究することまた至って容易なり。かつこれを今日に講究するは日本の学を起こすに最も必要なる事なり。

第三　欧米各国の教育法は、唯人の学力を養成するに止らず、人物・人品・人徳をもあわせて養成するなり。……花のみを目的とするときは暖室中の寒梅のごとく早く開花を見ることを得るも、その花の勢力に至りては樹木全体を養成せるものにしかざること遠し。学力人物ともに養成するは、あたかも樹木全体を養成するがごとし。」（同前、一〇〇～一〇一頁）

この方針から、哲学館の方向性を、次のように定めたのでした。

「第一に、その従来の学科東洋哲学中、もっぱら日本従来の学問・芸術即ち和

文学・漢文学・仏教・儒教・神道・日本歴史を講究するの方法を設けんとす。これ一国の独立上、必要なればなり。

第二に、従来の学科中、西洋哲学を主とし東洋哲学を属としたるも、今後は漸々に東洋哲学を正科とし西洋哲学を副科とするの方向を取らんとす。これ日本の学問を振起するに必要なればなり。

第三に、哲学館に大なる寄宿舎を設け、余自らその舎長に当り、毎日舎生とともに飲食し、朝夕舎生とともに運動し、ともに談話し、ともに交情を通ずるの方向を取らんとす。これ人物養成に必要なればなり。」（同前、一〇二頁）

それから間もなく、明治二二年八月八日には、「哲学館将来の目的」を発表、

「……ただ我が邦（くに）の学問中に日本在来のものと支那伝来のものと印度伝来のもの

の別あるのみ。しかしてそのいわゆる伝来のものはその初め日本に伝来してより以来、千余年を経過し、我が国在来の文物とともに成長しともに発達して、一種固有の日本性を帯び、この諸元素相い和し相い合して一種固有の国風民情を化成し、その今日印度・支那にあるものと大いにその性質を異にするに至れり。すなわちその学は日本固有の学と謂わざるべからず。……ただその主義とする所、日本主義を取りて一方には日本国の独立を維持し、一方には日本固有の諸学を愛護し、その学科中の東洋部は日本固有の学（すなわち神・儒・仏三道及び我が邦固有の哲学、史学、文学）を教授するものとし、ようやく進みて他日、日本大学の組織を開かんと望むものなり。」（同前、一〇三頁）

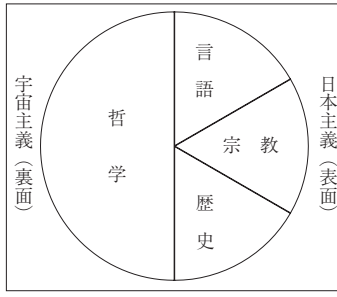
と述べています。日本固有の学問・文化を深く尊重するに至ったのです。

さらに明治二二年一〇月一八日の「哲学館目的について」（長文）において、従来必ずしも明らかにされていなかった「主義」、いわば理念について、あらためて詳しく説いています。円了は根本に国の独立を護るという精神を置き、行き過ぎた欧化主義に対し日本主義と宇宙主義（客観的真理、哲理）とを調和させるべきであるとして、次のように説くのでした。

「……たとい日本なる名は存するも日本なる実は疾くに天外に飛散して、その形跡を認むべからざるに至らん。すでにかくのごとくならば、いずくんぞよく日本の独立を維持するを得んや。これ余のもっとも憂うる所にして、いわゆる日本大学は上掲の三者すなわち言語・歴史・宗教を完全に結成し、もって日本独立の基礎を堅固にせんと期するゆえんなり。……その裏面に入ればなお一の大なる目的あって存す。これを名づくれば宇宙主義ともいわんか、すなわち宇宙学理を研

究することこれなり。……

以上を概括して、哲学館の目的事業を図解を以て示せば、左のごとくなるべし。すなわち表面よりは言語・宗教・歴史をもって日本主義を構成し、もって日本独立の精神基礎を確立し、裏面においては、宇宙主義すなわち普く宇宙間の真理、もしくは哲理を研究するに在り。……」（同前、一〇五頁、一〇七頁）



日本主義と宇宙主義

なお、この日本主義と宇宙主義の二つに関して、けっして一方に偏ってはいけないということも注意しています。

こうした教育のもとに、どのような人材養成をめざすかも、ここには記されています。円了は、「広大なる一国の基礎」「すなわち国民全体の改良をなすは果

して何ものなりや。その教育家・宗教家・哲学家なること問わずして明らかなるべし」との認識を持っており、この者たちに「よくその職を奉じその任を尽し、智育・徳育をして完全併進せしめざるべからず」との思いでありました。円了が哲学館で育成しようとした人材は、主にそうした人々だったのでした。

参考までに、その中で国民をリードすべき哲学家についておよびそれら三者の哲学教育に関して、次のように語っています。

「第三、哲学家として世に立つことまた必要なり。すなわち社会の万事、皆なこれを哲理に訴え、哲理をもって裁判すること是なり。万般の事、皆な空理空想を離れて原理原則に照らし、よく哲学を応用せば、その社会国家を益すること果たしていくばくぞや。ゆえに諸子の哲学家として社会に立つことその国家のためにはなはだ必要なるを知るべし。

以上（教育家・宗教家・哲学家における哲学の意義）は直接上より陳述せしところなれども、元来、哲学は諸学の王、もしくは統合の学問なり等の定義もあるごとくにて、よくこれを応用せばいかなる事業にも活動するを得べく、また政治・法律・経済等の諸学に赴くことをも得べく、その他、著述家・演説家等にもなることを得べし。ゆえにその間接上の事業に至りては、ほとんど枚挙に暇あらざるなり。……」（同前、一〇八頁）

こうして、「人材を陶冶し、人心を修養堅固にし、諸般の原理を示して万事に応用せしむる等、その利を与え世を益すること、実に万世不朽と謂うべし」（同前、一一一頁）と言って、日本主義と宇宙主義ないし哲学教育を通じて人材を育成することの重要性を強調しています。

四　円了の教育理念　蓬莱町時代

明治二二年一一月一三日、哲学館の校舎は、麟祥院から蓬莱町の新校舎に移ります。この移転式において円了は哲学館の従来の理念を紹介し、哲学館改良の方針として、以下の四項目を示しました。

第一に、我が国旧来の諸学を基本として学科を組織すること

第二に、東洋学と西洋学の両方を比較して日本独立の学風を振起すること

第三に、知徳兼全の人を養成すること

第四に、世の宗教者、教育者を一変して言行一致、名実相応の人となすこと

また、「他日、一箇の専門学校を開き、国家独立の大機関ともいうべき歴史科・言語科・宗教科を分ち、日本大学ともいうべきものを組織し、学問の独立と共に国家の独立を期す」とも述べており、日本主義の大学をめざすことを明確に訴えたのでした。（以上は『井上円了の教育理念』五六頁）

明治二三年九月の「哲学館に専門家を設くる趣意」においても、我が国固有の学問を研究するのは、「日本従来の学問を振起するに必要なるのみならず、日本人の心を維持し独立を保存するに欠くべからざるものなり」といい、「日本固有の諸学を基本としてこれを輔翼するに西洋の諸学をもってし、その期するところ日本学の独立、日本人の独立、日本国の独立をもってせざるべからず」等と主張しています（同前、一一

二頁、一一三頁）。

この哲学館の移転式の演説で、井上円了は「知徳兼全の人を養成する」ことに触れていました。彼はまた「哲学館の改良」の中でも、知育がいかに進歩しても徳育も平行しなければ効果がないといっています。つまり、知識教育だけでなく、人間力育成のための教育も重要と考えていたのです。この人間力の育成については、あくまでも本人が自分のために自覚し、実行することが重要である、と円了は考えていました。また、そのことを推進する具体的な方法として、「寄宿舎」を造りました。自主性をはぐくむために、規則は作らず、また茶会などを催して、学生に慈父のごとく接したとの

蓬莱町校舎

ことです（『井上円了の教育理念』六一～六二頁参照）。

明治二六年四月の、「哲学館の目的」を書いた短文にも、「哲学館の目的とする所は、文科大学の速成を期し、広く文学・史学・哲学を教授するにあるも、なかんずく教育家、宗教家の二者を養成するにありてその方針とするところは、教育の方は日本主義を取り、宗教の方は仏教主義を取ることとなせり。……」とあり、これらは「余が護国愛理の二大義務に関係するもの」であり、「これを要するに、余の教学に関する事業は大小種々あれどもすべて護国愛理の二大目的を実行するにほかならざるなり」とあります（『東洋大学百年史』資料篇Ⅰ・上、一一三頁、一一四頁）。

なお、明治二九年一二月、蓬莱町の哲学館校舎は火災により失われてしまい、のち明治三〇年一〇月、小石川区原町に完成した新校舎の開館式を行いました。そこが現在の白山キャンパスの地です。

五　円了の教育理念　第二回外遊・哲学館事件以後

井上円了は、明治三五年一一月一五日、第二回目の海外視察（インドおよび欧米）に出発しました。この間に、文部省が哲学館の中等教員無試験検定の特典をはく奪するという、「哲学館事件」が起きたのでした。当時、ロンドンに達してこの事を知った円了は、その地から種々指示を送ったりしてその対応に取り組むのでした。明治三六年七月二七日に帰国、九月には哲学館の新しい教育方針を、「広く同窓諸子に告ぐ」と題して発表、哲学館事件をかえって「独立の精神を発し、実用の教育を施す」の一大機会であるとし、イギリス視察の成果を取り入れ、独立自活の精神を重視する改革案

をいくつか提示しました。その内容は次の通りです。

①時勢にしたがい、私立大学の開設を準備すること、その際、「哲学館事件」を受けて、この上は独立自活の精神をもって開設しなければならないこと。

②教育部は、実力修養を主として、もっぱら教員検定試験に備えること。このことは、かえって短期に資格取得できる道をひらくことになること。

③哲学部の目的は、もっぱら宗教家を養成するにある。本館では、「（各宗の）旧来の註釈的教授法を廃して、達意を主とし、活用を本とし、将来の社会に立ちて各方面に向かい、実地に活動し得る人を造らんとす」る。仏教の基礎のほか、倫理・心理・法制などを教授して広い知識と視野を身につけさせ、これに加えて英語もしくは漢学を重点的に教えることによって、より実用に適切ならしめること。

④時代の変化に応じ、内国のみならず外国（アメリカ・中国・朝鮮）に出て活躍できるよ

う、英語・中国語を中心に語学教育を行い、国際化に対応すること。

⑤哲学館事件を経ての大学開設を記念して、記念堂を建立し、四聖堂と称して古今東西の大哲学者たる釈迦・孔子・ソクラテス・カントを祭り、永く哲学の記念とすること。

⑥哲学館の方針は、哲学の理論の研究だけでなく、その応用を講じることにある。教育・宗教の直接的な応用に限らず、間接的に法律家や工業家など他の職業に従事して、哲学を社会全般に応用することを奨励してきた。哲学の応用はすべての分野にわたる。大学開設後は、やはり理論の蘊奥を究めるとともに、万般の応用を奨励する。というのも、日本人の弊としていたずらに空論に走って実用を忘れる傾向があるので、本館の教育はこの弊を直すことにあること。

（「広く同窓諸子に告ぐ」『東洋哲学』第十輯第九号、一一五～一二〇頁）

円了の教育理念に「実力主義」が言われることもありますが、それは哲学館事件を経てのことなのです。また、この頃からすでに「国際化」をかかげていたのでした。

なお、明治三五年頃、世間では次のような問題点が指摘されていました。「帝国大学においてすらも教師はただ生徒の脳髄になるべく多くの知識を注ぎ込まんとし、生徒もまた試験に及第せんがためになるべく多くのことを暗記せんと努めておるのである。ゆえに今日の教育は開発主義にあらずして注入主義であり、思考的でなくして器械的である。そもそも大学は知識を与えるところであるのか、そもそも知識を得るの道を教えるところであるのか。」このような教育界にあって、哲学館の教育は開発主義であり、知識を得る方法を教えることにありました。そして、そのために哲学や思想を広く教授しましたが、その際には「自由討究」を重んじたのでした（『井上円了の教育理念』一六四～一六五頁参照）。円了の教育に対する理念と実践が、現代に求められる教育をつとに先取りしたものであり、いかに卓越していたかがうかがわれます。

六　東洋大学の由来

以上、井上円了の教育理念をたどってきました。円了は、明治三七年四月一日、哲学館大学の開校とともに哲学館大学長に就任、しかしその後、明治三九年一月、同職を辞し、哲学堂に退隠しました。この年四月からは、修身教会運動のため、全国を巡講することになります。

哲学館大学はその後、円了退任後の明治三九年六月二八日、私立東洋大学と改称されます。この背景には、当時、その改称が適当であるような理由が何かあったのだと思いますが、実はこの東洋大学の名称は、その一〇年ほど前、明治二九年に、すでに

井上円了によって提唱されていたのでした。その前、明治二七年から二八年にかけての日清戦争で、日本は大勝利をあげており、そうした時代の高揚した雰囲気に影響されたこともあったのでしょう、円了は明治二九年の「新年のあいさつ」において、従来の哲学館の「日本大学」「日本主義の大学」を実現するという目標を、「東洋大学」の実現へと展開させたのでした。円了はその「新年のあいさつ」の中で、次のように述べています。

「西洋各国に東洋学校の設けあり、また各大学に東洋学を専修する学科あることは余が帰朝の際すでにしばしば世間に報道せしところなれば、いまさら喋喋を要せざれども、我が邦においては東洋学中の泰斗たる支那の学も印度の学も古来自然に集まりおるにもかかわらず、今日なお一の東洋学校なくまたこれを計画する者すらあらざるは、余輩の深く怪しみかつ大いに遺憾とするところであります。従来我が邦にて西洋

の学問を修むるには遠く欧米に遊学してその師を尋ぬるが如く、今後は西洋にて東洋の学問を志すものは遠く我が邦に来りて学を求むるようにしたいと思います。」

確かに円了は明治二二年頃など、日本大学、日本主義大学を考えていたのですが、明治二九年当時は、日本の学問・文芸に国学・漢学・仏教学が混入・含有されていることにもかんがみ、また西洋の学問体制にかんがみて、東洋学の世界的な拠点を形成するために、東洋大学を設立するのだとの考えに至っていました。ですから、日本の伝統的学問・文化をどこまでも尊重しつつ、その中に含まれている東洋の学問・文化の研究をも進め、そのことによって世界中から東洋学を学びに来るような大学を創ることが、東洋大学という名称に託された目的であったといえます。東洋大学の原点はここにあることを、我々はもう一度、思い起こす必要があります。

そしてこの崇高な志を、東洋学以外のすべての分野にも及ぼすべきです。もちろん、

平成二五年度に改組・設置された、文学部・東洋思想文化学科は、ぜひ東洋の学問の世界最高峰の学科となって、必ずや世界中からその学問を学びに来るような学府にすべきだと思いますし、と同時に、どの学部・学科も、どの研究科・専攻も、東洋学分野と同じように世界的水準の達成をめざして奮闘・努力すべきであると思うのです。

ちなみに、明治四三年二月に『修身』誌上に発表された「東洋学の再興と哲学館の由来」においては、明治初年より明治二〇年頃まで続いた極端な西洋崇拝が、逆に我が国における東洋学再興の機運を生んでいることを述べ、哲学館は東京大学と異なって、東洋を本とし日本を主とする方針を取ったこと、しかし西洋を排斥することなく、東洋の学を主とし西洋の学を客とし、彼・我、主・客合わせて研究する主義であり、しかも宗教主義よりは学問研究の立場から東洋学を発揮しようということが目的であった、と述べています。

以上、円了が哲学館の運営に関して発信した基本的な文章を、つぶさに辿ってきました。以上の井上円了の教育理念を総合すると、次のようにまとめられるでしょう。

①哲学教育を根本とする
②東洋および日本伝統の諸学を重んじる
③西洋の諸学に学ぶ
④知徳兼全の人材を育成
⑤独立自活の精神を実現
⑥実力の養成強化をはかる
⑦哲学の応用を重んじ、実用性を重んじる
⑧国際化に対応する
⑨自由開発主義を旨とする

井上円了肖像画
（岡田三郎助画）

⑩主に教育者等の教育を重視する

私たちはこれらの理念を、時代の中で適切に生かしていくことが、とても大事だと思います。

付録　建学の精神の再構築

良質の教育の根本には、明確な建学の精神があり、大学の人材養成の目的がはっきりしていることが大事です。私は、建学の精神として、従来掲げてきた「諸学の基礎は哲学にあり」を、降ろす必要はないと思っています。やはり継続性を考えても、この句を根本に据えるべきでしょう。しかしこの句が何を意味しているのかについては、共通の理解を得ていることが重要です。

元来、この句の意味するところは、哲学はあらゆる学問分野を根本において体系づけ、意味づけるということだと思われます。確かにかつて、哲学はそうした諸学の総

合をなす根源的な価値観を体現するものと考えられていました。しかし今日、一元的な価値観は失われ、多様な価値観が主張され、価値の相対化が進んでいて、哲学も総合の学ではなく、一つの個別科学になりさがっているのが実情です。この傾向は、今後も続くことでしょう。

しかし、人間が社会において生きていくためには、その人なりに、意味のまとまりのある世界観・人間観を持ち、その中で個々の事象の意味づけを得ていかなければならないはずです。そこで要請されることは、多様な価値観に関して理解を深めるとともに、自己の人生観・価値観を持ち、その中で自己そのものや自己が携わる学問分野の意義を深く了解していくことといえます。この自覚を持たせていくことは、学生のその後の人生にとってもきわめて有意義なことでしょう。

こうして、「諸学の基礎は哲学にあり」という建学の精神は、ただ自分の専門分野の知識や技術を身につけてそれ以外は知らず考えないようなことではなく、根本的な

人生観・世界観にかかわる多様な物の見方・考え方の教育をも行いつつ、自ら自己の人生と自己の学問の社会的意味等について深く考えてもらい、そこから自分なりの座標軸を定めてもらって、その上で学問を身につけてもらうことを意味することになります。

そのように、哲学には根源的に考え体系的に整理するという意味がありますが、同時に円了は哲学の効用として、「思想の錬磨」をあげました。これを今日的表現でいえば、「考察のトレーニング」といえましょう。さまざまな事象に関して、けっして常識や先入観、偏見等にとらわれず、常に柔軟に「なぜだろう」と疑問を持って掘り下げて考え、さらに論理的・体系的に考える。この訓練をすることもまた、哲学ということの意味の中にあります。物事の本質に迫るべく考える姿勢・態度を身につけてもらうことが、哲学教育の重要な意味です。

なお、以上のことは、今日の大学の人材養成の課題として、大学関係有識者、産業界等、種々の方面において強調されているところです。

一方、従来、建学の精神と関連してよく言われる言葉に、「独立自活」「知徳兼全」があります。この中、「独立自活」とは、単に受け身的に人生を送るのではなく、自主的・主体的に行動する力を身につけることを意味するでしょう。それには、前に述べた常識や先入観等にとらわれない姿勢もかかわっています。また「知徳兼全」とは、今日的にいえば、学力と人間力とを兼ね備えた人間を実現するということと翻訳できます。ここで人間力とは、学士力との関連で言われている、課題発見能力や問題解決能力、コミュニケーション能力、リーダー・シップ力やチームワーク形成力、協調性などを意味するものです（この人間力については、最近言われているものを後に掲げておきます）。この学力と人間力とを涵養することが、「知徳兼全」ということと受けとめられます。

そうであれば、実は東洋大学の建学の精神は、すべて今日の社会から求められていることを先取りしたものだったということになります。ということはすなわち、今こそ東洋大学の出番であるということなのです。

以上、本学の建学の精神をまとめてみますと、次のように表現できると思います。

「諸学の基礎は哲学にあり。」

その意味は、

①多様な価値観を学習し理解するとともに、自己の哲学（人生観・世界観）を持つ人間を育成する。

②先入観や偏見にとらわれず、物事の本質に迫る仕方で、論理的・体系的に深く考える人間を育成する

③社会の課題に自主的・主体的に取組み、よき人間関係を築いていける人間を育成

する。

さらに、円了の最晩年の著作、『奮闘哲学』には、哲学には向上門と向下門とがあるのだとされ、しかも「向上するは向下せんがため」だとあります。このことは、自分を磨くのは人々のためであるということです。苦しんでいる人々、抑圧されている人々、弱者や虐げられている人々のためにはたらいていける自分を確立していくためにこそ、自分の能力を高め磨いていくのだというのです。哲学の道には、そういう崇高な生き方がこめられていたのです。ここから、次の表現を得ることができます。

④自分を磨くのは、人々のためにはたらくことができるようになるためであり、そのことを自覚して学業に励むのが東洋大学の心である。

さらにその同じ『奮闘哲学』には、有名な句、「活動は天の理なり、勇進は天の意なり、奮闘は天の命なり」という言葉があります。円了は、けっして理論のみをもてあそぶことをせず、実際の活動を重視し、しかもどこまでもはたらいてやまないその活動の中にいのちの本質を見出していました。私は、ここにこそ、東洋大学の精神があると思うのです。ここから、次の表現を得ることができます。

⑤現実社会における活動の中にどこまでも前進してやまないのが、東洋大学の心である。

参考資料　いわゆる人間力の内容について

「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎力」

（三つの能力・一二の能力要素）

前に踏み出す力（アクション）　一歩前に踏み出し、失敗しても粘り強く取り組む力
　主体性　　物事に進んで取り組む力
　働きかけ力　　他人に働きかけ巻き込む力
　実行力　　目的を設定し確実に行動する力
考え抜く力（シンキング）　疑問を持ち、考え抜く力

課題発見力　現状を分析し目的や課題を明らかにする力
計画力　課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力
創造力　新しい価値を生み出す力
チームで働く力（チームワーク）　多様な人々とともに、目標に向けて協力する力
発信力　自分の意見をわかりやすく伝える力
傾聴力　相手の意見を丁寧に聴く力
柔軟性　意見の違いや立場の違いを理解する力
状況把握力　自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力
規律性　社会のルールや人との約束を守る力
ストレスコントロール力　ストレスの発生源に対応する力

（経済産業省「社会人基礎力に関する研究会」中間とりまとめ。平成一八年二月）

東洋大学史ブックレット３
井上円了の教育理念
二〇一二年一一月二三日　発行
二〇一九年 三 月 一 日　第七版発行
編集
井上円了研究センター
著者
竹村牧男（東洋大学学長）
発行
学校法人東洋大学
東京都文京区白山五―二八―二〇　〒一一二―八六〇六
印刷所
株式会社フクイン

東洋大学